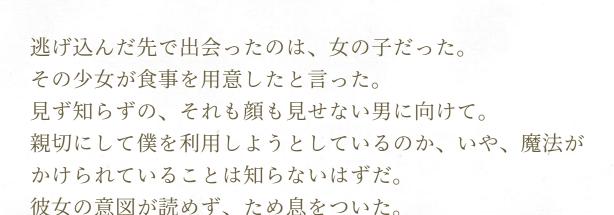




一日目追加 HO スミレ







食事はともかく、体にべっとりと付いた血は拭いたい。 治りかけている腕を使い、扉に寄った。 念の為、扉の向こうに人がいないかを探り、ゆっくりと開 ける。

ボウルにたっぷりの湯が入っていた。 真っ白なタオルと食事が載ったトレーも置かれていて、彼 女が本当のことを言っていたのだと知る。 僕はそれらを引き寄せ、部屋の中へ入れた。

トレーには湯気の立つスープと切られた果物、パンが置かれている。

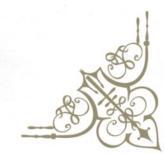
屋敷にいたときよりもマシな食事だ。

しかし、顔も知らない相手が作ったものだというだけで警 戒してしまう。

走り続けて空腹ではあったが、僕は魔法のせいで食べなく ても生きてはいける。

この場においてはおかげというべきか――とにかく、なにが入ってるとも知れないものに手をつけることはできなかった。







タオルを湯に浸し、体を拭いていく。

腕が治ってきていてよかった。

まだ再生しない足を拭くときは痛みを伴ったが、体を拭い たことで少しだけ気分がいい。

今になって、服があちこち破れていることに気がついた。 屋敷で与えられた服だ。

脱ぎ捨ててしまいたかったけれど、当然、替えの服は持っていない。

今しばらくは我慢しよう。

体を拭いて、やっと一息つけた気分だった。 フクロウや虫の鳴く声が聴こえて、静かで、穏やかな夜。

「絵が描きたい」

こんな穏やかな夜は孤児院にいたとき以来だった。 漠然と浮かんできた欲求を満たしたかったが、そのための 画材はここにない。

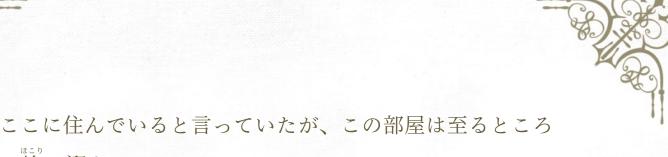
やりたいことがすぐできる環境など、僕にとって贅沢以外 の何物でもないのだと思い直す。

孤児院にいたときも、屋敷にいたときもそうだった。

そういえば、マリーはどうしてここにいるのだろうか。 話し方や扉越しで得た情報から、恵まれた環境で育っただ ろうということはわかる。

そんな少女が、こんな山奥でなにをしている?





に生んでいると言っていたが、この部屋は主るところに埃が溜まっていた。 彼女の言うことを信用していいのかわからない。

そう思いながら目を閉じると、深く深く眠りに沈んでいけそうだった。

朝、小さな足音で目が覚めた。

彼女はもう目を覚ましているのだろう、階段を行ったり来たりしている音がする。

ふと、朝の光を受けてきらりと光るスープに目がいった。 冷えきったそれに入ってる野菜が、不揃いな切られ方をしていた。

そういえば『料理も少しならできる』と言っていた。 自ら料理をしなくてもいい環境で育ったのだろう。 孤児院は当番制だったから、何度も料理をしたことのある 僕とは大違いだ。

そんなことを考えていたら、扉の前で足音が止まった。



